日本国際政治学会2022年度研究大会
国際交流分科会Ⅰ　10月28日（金）

柳澤健と「国際文化事業」

中村信之
神田外語大学外国語学部英米語学科　講師

写真の出典：
小野孝尚『詩人柳澤健』双文社出版（1989年）

本研究の目的

【共同研究の目的】

- 柳澤健という人物に焦点を当て、外交官であり、詩人でもあった柳澤の人物像を明らかにすると共に、柳澤が近現代日本史の中で果たした役割について考察する。

【本研究の目的】

- 柳澤の活動の中でも、とりわけパブリック・ディプロマシー（「国際文化事業」）に焦点を当て、同事業における柳澤のインパクト、並びに人物像について考察を行う。

（１）**柳澤の「国際文化事業」の構想・思想**

（２）**1930年代における「国際文化事業」の思想的変遷**

研究の手法

一次史料を用いた分析と解釈

小野孝尚『詩人柳澤健』双文社出版（1989年）

黎明期【1934（昭和9）年/35（昭和10）年】

- 柳澤健「国際文化事業とは何ぞや」『外交時報』第70巻第1号（1934年）
- 柳澤健「国際文化事業とは何ぞや（続）」『外交時報』第70巻第3号（1934年）
- 柳澤健「国際文化事業の為めに！」『文藝春秋』第11号11月特別号（1934年）
- 柳澤、他「国際文化座談会」『文藝春秋』第13巻第11号11月号（1935年）
- 小津安二郎（監督）『鏡獅子』松竹大船製作（1935年）

中期【1936（昭和11）年】

- 柳澤健「国際文化事業部に就いて」『三田広告研究』第21号（1936年）
- 柳澤健「ワット生誕二百年祭と国際文化」『WATT』第9巻第4号（1936年）

後期【1938（昭和13）年】

- 市川彦太郎「国際文化事業について」『三田広告研究第』第24号（1938年）
- 箕輪三郎「国際文化協定概説」『法学協会雑誌』第56巻第6号（1938年）

本研究の主な二次資料

- Tomoko Akami (赤見友子), “The Emergence of International Public Opinion and the Origins of Public Diplomacy in Japan in the Inter-War Period.” In *The Hague Journal of Diplomacy*, Vol.3, p.99-128, 2008.
- Akira Iriye (入江昭), *Cultural Internationalism and World Order*. Maryland: The Johns Hopkins University Press, 1997.
- Nicholas J. Cull, *The Cold War and the United States Information Agency: American Propaganda and Public Diplomacy, 1945–1989*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流－国際文化振興会の創設と展開』（有信堂、1999年）。
- 戸部良一『外務省革新派－世界新秩序の幻影』（中央公論新社、2010年）。

パブリック・ディプロマシー（PD）

政府間同士で行われていた伝統的な外交に対し、海外の大衆に働きかける国際的な対外行動。[Cull, 2008]

- １．対象理解・・情報の分析（例）海外での世論調査
- ２．政策広報・・情報の普及（例）記者会見
- ３．文化外交・・文化への興味を発掘
- ４．文化交流・・（例）交換教授、学生の文化交流
- ５．国際報道・・（例）通信社を通した報道

【ポイント】

- 国際政治上で**大衆**が重要なアクターであると認識されたこと。
- 1次大戦後、**秘密外交から公開外交**へ。PDの重要性が認識される。
- 「１～５」は各々、歴史的ルーツが異なる。パブリック・ディプロマシーは偶発性が薄れ、**計画的で明確な目的**をもつ事業として実施される。
- 同じパブリック・ディプロマシー事業においても、**アクターによって目的や価値・思想が異なる**ことがある。

外務省と柳澤健

- 外務省改革運動の先駆け

【契機】1919（大正8）年パリ講和条約、「サイレント・パートナー」

- 改革運動の内容

原案はパリの「革新綱領」（重光葵、堀内謙介、有田八郎、斎藤博）

23項目が「**革新綱領要目**」として内田康哉外相に提出

（A）「国内諸般の事情を通報せしめるための一局新設」、「一般社会の外交知識啓発」⇒1921（大正10）年8月に**情報部**設置（20年4月に非公式で開設）

（B）「門戸を開放し人材を養成し任免抜擢及配置の妥当を期すること」

⇒外交業務の多様化、**外務省以外から人材を採用**する必要性

- 19（大正8）年：柳澤は大阪朝日新聞社に入社、論説委員として文芸欄を創設
- 20（大正9）年7月：フランス、イタリア、イスパニアを視察（21年9月帰国）
- 22（大正10）年：外務事務官、アジア局第三課
- 24（大正13）年：大使館三等書記官、フランス在勤

「国際文化事業」のルーツ

- １．外交上の戦略
  （例）対中国政策（1898年の東亜同文会、20年代の「対支文化事業」）
  　　秘密外交から公開外交へ、大衆が国際政治上に登場
- ２．国際主義と「文化」の台頭
  （例）国際連盟知的協力員会（1922年、新渡戸稲造）
- ３．自国通信社の必要性　ー「情報」と「大衆」
  （例）アバス（1835年）、ヴォルフ（1849年）、ロイター（1851年）
- ４．国威・近代日本ナショナリズムと「文化」・「人種」
  国際政治上の「黄禍論」、北米日本人移民の排斥
  （例）小村寿太郎「国民外交」（1907年）
  　　鶴見祐輔（鉄道院）の全米講演ツアー（1924～25年）
  　　IPR（太平洋問題調査会）（第1回/1925年）

「国際文化事業」の目的

柳澤健「国際文化事業とは何ぞや」『外交時報』（1934年）

- **一国の文化活動**を国内のみに局限せしめずして**国際的にこれを喚発し宣揚する**と共に、他国の文化についても進んでこれを吸収し咀嚼せんとする活動

⇒戦後も自国の強大さを維持するのに、思想戦は避けられない

- 文化外交は①紛争予防、②政治外交・経済外交を強化・助長

⇒**相互の理解と愛と尊敬**によって、国家間にも和やかな永続的な関係を樹立する

- 内容は①日本文化の講座、②日本語学校、③学者・学生の交換、④美術品・出版物の紹介・交換、⑤演劇・映画・音楽の海外公演、⑥国際文化団体の助成、⑦国際ラジオ放送、⑧スポーツの海外進出
- 日本は**東西一切の文明を搬入してこれを統合・融合し得る**唯一の国。

⇒世界人類のための貢献

＊大隈重信、徳富蘇峰らが提唱した「**東西文明融合論**」から影響を受ける

- **国内の文化活動の発展**にも寄与

文化の宣揚と『鏡獅子』

柳澤健「国際文化事業の為めに！」『文藝春秋』（1934年）

・日本の文芸作品を海外へ出し、反響や批判を受けるといい。これが作家に示唆を与え、反発心を与え、活力を与える。⇒**日本文芸界の発展のため**

・ファッショ的な言説をろうそうとは思はないし、**空疎な国際親善主義**を提唱しようとしているのではない。国際文化事業は国防の前衛を受けもつもの。

柳澤健、菊池寛、藤田嗣治、他「国際文化座談会」『文藝春秋』（1935年）

- 背景：「日本（文化）が海外から理解されていない」
- 文化宣揚の課題：（A）大衆かインテリか、（B）古典文化か現代文化か、（C）物珍しさか、芸術的理解か
- 国際文化振興会の映画『鏡獅子』（1935年6月25日撮影、24分）

6代目・尾上菊五郎（1885-1949）主演の歌舞伎。フィルムは海外の日本大使館に送られ、海外のみで一般公開。

- （期待される結果）：**日本の文化的遺産のリファインメントが感じられればよく**、わかる必要はない。日本人も歌舞伎はわからない。

1936年以降の「国際文化事業」

柳澤健「国際文化事業に就いて」『三田広告研究』（1936年）

- 「我が日本が東亜の安定力たる使命を有することを世界に認識せしめるためには、日本文化の本質を理解せしめることが最も根本的なことであります」
- 「1次大戦の反動として極端に走り過ぎた国際主義が、最近国家主義によって是正されている。」
- 「我が国は東方諸民の先進、先覚国としての使命があり後進の東方諸民族、東方諸国を指導、誘掖（ゆうえき）する義務がある。対支、対満以外にもアフガニスタン、イラン、トルコ、シャム等の**後進国に対し文化事業を行い、彼らを指導・啓発すべきが我が国の使命であり、義務**。」

箕輪三郎「国際文化協定概説」『法学協会雑誌』（1938年）

- 「国際文化事業は人間相互の共感と理解とを通じて各個の正しい存在を尊敬せしめつつ**各個の美はしい花束を人類文化の花壇に捧ぐる**高貴な使命を全うする希望に通じる。」
- 「それは**各個の持つ差異を拒否するのではなく**て差異を生かすための障害を除いて美はしい調和と普遍を建設する無限な努力である。」

柳澤健と「国際文化事業」

1．国威のための「国際文化事業」

- **普遍主義**・人類文化への貢献という羨望
- 「思想戦」＝情報や文化で各国が戦う　＊近衛の「力の支配」と共通
- 諸外国から尊敬と愛を受けるため、**国家主義的な使命感**

2．国内文芸界の活性化　ー「カタリスト」

- 作品が海外で批評されることが、日本の文芸界の活性化に繋がる
- 創作活動、海外文芸への造詣から「文化に触れる」意味を知っている

（例）文化を「わかる」必要はない。リファインメントが感じられれば。

- ＝「**カタリスト**（Catalyst）」（芝崎厚士）

3．「思想戦」から、ウルトラナショナリズムへ移行？

- 「文化の発揚」のための「国際文化事業」から、「後進国の指導・啓発」のための「国際文化事業」⇒**「国際文化事業」概念の変化**